

〔2〕実践事例

《共同研究》

集団を意識させ、生徒間のやりとりの力を高めることをねらった実践例 〈1年生の取り組み〉

(1) コミュニケーションの実態

本学級は発達年齢が5～6歳の生徒が大半を占めており、生活のいろいろな場面で精神的な幼さを残している。入学当初、この幼さのため人との関わり方も自分本位で、相手や、集団の中の一員であることを意識した言動が取りにくい生徒が多かった。一方では友だちに対して関心が殆どなく、自分から関わろうとしない生徒もいた。従って、相手の言うことをよく聞いて反応したり、相手を思いやって話したりすることは苦手で、生徒間のやりとりは未熟であった。また、新入生であることから、「仲間」としての意識が低く学級としてのまとまりもできていなかった。コミュニケーション指導内容表においては殆どの生徒が2～3段階に所属し、「正しく聞き取る」「相手に分かるように表現する」などの基礎的な力も乏しいという実態がある。

(2) ねらい

- ・クラスの友だちをよく知り、お互いに認め合う「仲間づくり」を進める。
- ・生徒同士のやりとりの必要性を理解させ、自分からすすんで関わろうとする意欲を高める。
- ・設定された場面であれば自信を持って自分の思いを表現できるようにさせる。

(3) 指導方針と手だて

社会のいろいろな人へコミュニケーションの対象を拡げていくことは、社会参加を目前に控えた高等部の生徒たちにとっては重要なことである。そこで1年生の実態から、校内では「生徒間のコミュニケーション」の充実を図ることとした。指導にあたっては、生活一般の学習やH・Rで、他を意識させる単元や場面を多く設定して友だちに関心を向けさせたり、みんなで力を合わせて活動する経験を重ねたりして仲間づくりを進める。同時に、楽しみのある活動や身近かで経験のある内容についての「話し合い」を取り入れ、自分の思いを少しでも伝えたり相手の話をよく聞いたりしなければ話し合いが成立しないことを理解させる。そして、話し合った内容が次の活動に生かされるように配慮して、思いを出し合うことの成功感を味わわせ、主体的に関わろうとする意識を育てていきたい。

(4) 指導計画

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
生活単元一般の題材	校内宿泊学習 自己紹介	奉仕活動 障害認識	仲間	長所・短所	運動会準備	現場実習の報告 友だちの紹介	看板づくり 学習発表会	校外学習の計画 友だちの良い所	クラス発表 友だちの障害	奉仕活動	クラス紹介 仲間
H・R活動	係・当番の決定	みんなでスポーツをしよう	ティータイム		係・当番の決定			ティータイム	係・当番の決定	卓球大会をしよう	ティータイム

◎日常生活の指導の時間には連絡事項を生徒から生徒に伝えさせたり、休憩時間の過ごし方の工夫を図るなど、意図的に関わりを持たせるようにしている。

(5) 指導の実際

① 題材名「友だちを紹介しよう」

入学以来さまざまな活動を通してクラスの友だちを「仲間」として感じてきてはいるが、積極的な生徒同士の関わりは特定な相手に限られていた。そこで、友だちを紹介するというを目的とし、お互いが取材をし合うという方法をとって学習を進めることとした。このことにより普段あまり話や行動を共にしない友だちとも触れ合うことができ、気恥ずかしさのため自分から話しかけられないでいる生徒にも取り組みやすいのではないかと考えた。

a ねらい

- ・取材を通し、友だちについて理解を深めさせる。
- ・やりとりをする必要感を持たせ、進んで友だちと話をしようとする意欲を高める。

b 授業の流れと生徒の反応

学 習 活 動	生 徒 の 反 応
1. 自己紹介をする。	入学時にスムーズに言えなかったA男、C男が比較的スムーズに言えたときには、他の生徒から「よかった」「上手に言えたなあ」などのつぶやきが出た。緊張してつまってしまう生徒に対し「頑張って」と声をかける姿も見られた。
2. 友だちの紹介を考えたり、取材をしたりする。 ・好きなこと、好きなもの ・得意なこと ・良いところ ・住んでいるところ など	何を質問するのは各自に任せため、半数の生徒が話すことが思いつかず、黙ったまま時間を過ぎてしまった。取材をする観点を与えフリートークの形態をとると、自分の方から話しかけに行く生徒が多くなり、だんだんと話が活発にかわされるようになった。「良いところ」は次々に相手をかえ聞き合いをしていた。普段黙っていることの多いB男やD男は生き生きとした表情で会話を楽しんでいるようであった。しかし、A男、F男は自分の方からは関わらず2、3人しか話をしなかった。
3. 友だちの紹介をする。	取材したことをもとに自分なりの言葉で言えた生徒が多かったが、ごく簡単なことにとどまった。紹介をされる生徒は、自分のことをどのように言われるのかを興味を持って熱心に聞いていた。

学習の導入の段階でB男は、話しかけられない理由の一つに「話すことがないから」ということを挙げた。友だちとの関わりを望んではいても、どのようにしていけばいいのかが分からずにいたようである。

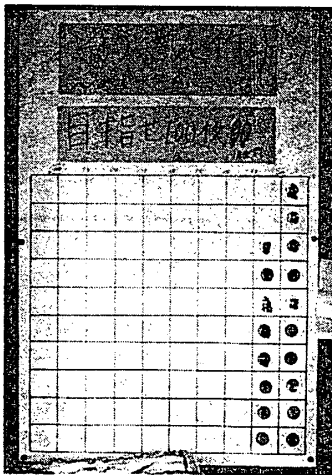
B男に限らず、人との関わり方が未熟な本学級の生徒たちには、このように意図的に場を設定して触れ合う機会を与え、コミュニケーションの楽しさや必要感を体得していく方法は有効だった。しかし、自閉的傾向があるE男、F男は、友だちとのやりとりを十分には楽しめなかった。今後、周囲の生徒が、彼らの障害の特性を理解しどのように働きかけていけるかが課題として残った。



友だちへの取材の様子

② 題材名「雑巾を寄付しよう」

本学級では、みんなで力を合わせ、自分たちができることで人の役に立ちたいという思いで奉仕活動に取り組んでおり、本題材はその発展である。みんなの意見を集め、主体的に関わらせることにより仲間づくりを進めたいと考え、計画段階から話し合いを取り入れた。また、寄付をするためにはある程度まとまった量を必要とする。11人が協力して縫い上げなければ達成することは困難である。雑巾づくりという活動そのものは個人の作業であるが、同じ目的に向かって取り組むことで生徒間の関わりが深められることを期待した。



目指せ！100枚

a ねらい

- ・みんなで協力して取り組もうという意欲を高める。
- ・自分の意見を人に分かりやすいように発表させる。

b 授業の流れと生徒の反応

計画段階では、雑巾を寄付をするという大きな枠だけを与え、寄付をする先、枚数、期限などは生徒主導の話し合いを行なった。しかし、話し合いを苦手とする集団であるので、生徒の思いを大切に生徒たちの手で考えた活動となるように、司会は指導者とした。このことにより、生徒の思いが話し合いの流れから外れないように導いたり意見の食違いを調整したりすることが可能となり、話し合いはスムーズであった。基本的には指導者は待ちの姿勢で臨むが、説明不足の時には分かりやすくまとめて提示したり、思いを十分に伝えられない時には適切な表現で言い直しをして問い返したりするなどの工夫をした。

寄付をする先の決定では意見の対立が生まれ、友だちの意見を聞いた上で自分の意見を発表する生徒や、理由付けをして自分の意見を主張する生徒など、やりとりが活発になった。

以上のような経緯で取り組み始めた雑巾づくりは、学習時間以外でも取り組む生徒も出てきて、まずまずの滑り出しである。友だちに「頑張って作ろう。」と声かけをする生徒も見られる。また、雑巾のもとになるタオルが足りないことから「校内の生徒や先生に呼び掛けよう。」という声が出て、話し合いによりポスターやビラの作成も行なわれた。今後も適宜話し合いを持ちながら、主体的な取り組みとして継続していきたい。

(6) 考察と今後の課題

この実践を通して、友だちへの関心が高まり学級集団としてのまとまりができてきた。学習中や日常生活の中で、進んで友だちを思いやる何気ないことばかけをしたり、お互いに声をかけあって行動を共にしたりするなどの関わりが生まれてきた。とはいえ、相手の立場を考えたり集団を意識して自分の思いをコントロールしたりすることはまだ十分でなく、豊かな人間関係を築いているとはいえない。必要感を持たせることが有効であったことをふまえ、目的意識を持って人や物事に関わらせていく指導を今後も進めたいと考える。そして、日常生活の指導との連携をより一層図り、学習場面で培った力を実生活で生かし使えるよう導いていきたい。

(木下)